

ばつくとらびすと その四七

英国人写真家ポンテイングが記した

芹川河口の tea-houses

英国人写真家ハーバート・ジョージ・ポンテイング(一八七〇―一九三五年)は、明治三四年に来日し、その後明治三九年まで断続的に、通算すると約三年、日本に滞在した。その間、東京、松島、日光、横浜、鎌倉、京都、奈良、瀬戸内海などを旅しながら日本の風景と風俗を撮影し、帰国後、日本で撮影した写真を数多く掲載した日本旅行記 *In Lotus-Land Japan* (一九一〇年刊) を出版した。ポンテイングは、また、一九一〇年から一九一二年まで、スコット大佐の南極探検にカメラマン・映画撮影技師として同行したことも知られている。

さて、ポンテイングは日本滞在中、彦根を数回訪れている。*In Lotus-Land Japan* には、長岡祥三氏による和訳がある(邦訳名『英国人写真家の見た明治日本』講談社学術文庫、二〇〇五年刊)が、抄訳であり、彦根の章(第十七章)は、残念ながら省略されている。

ポンテイングは明治三十六年(一九〇三年)五月に彦根に初めてやって来た。その後も彦根に数度来ており、彼の著書には、玄宮園や楽々園の景観、城山の様子、八景亭の仲居さんたちとの楽しい交流などのことが綴られている。また、著書内には、玄宮園を撮影した二枚の写真が収められていて、園の当時の様子を窺わせるものとして貴重である(本稿の最終ページに、参考としてその二枚の写真を掲載しておいた)。

ポンテイングは、初回の彦根訪問時、城山に登っているが、そのとき、ちょうど城内に遠足に来ていた何百人もの学校生

徒たちの群れと遭遇する。彼は著書に、「子供たちは教師たちに引率されてはいたが、城の中庭や林の中の至る所を走り回り、歓声をあげていた」と書き、また「城の中には、菓子屋や果物屋、氷入り飲物を売る者、風船を売る者、アイスクリーム屋、おもちゃを売る女性」、「色とりどりの砂糖菓子を積み上げた小さな桶をたくさんもった男」などがいて、子供たちはあちこちの露店に引き寄せられていつては、財布から小遣いを出してそれらを買っていたと綴っている。彦根城内は、明治後期にはすでに、学校の生徒たちが大挙してやって来る遠足地となっていたことが分かる。

ところで、ポンテイングは、彦根城や玄宮園の様子だけでなく、芹川の河口近くで行われていた少々贅沢な「娯楽」のことについても記していた。

日本の「上流階級」の人々に大層好まれていた娯楽が、琵琶湖岸にある、芹川が湖に注ぎ込む地点を訪れることだった。そこは砂利の多い、長く続く浜辺だったが、何軒かの小さな休み茶屋 (tea houses) があつた。その茶屋の中で、ここで供される娯楽を求めてやって来た人たちが座って宴を張り、漁師らがとてつもない長さの網を取り出し湖の中へ投じるのを眺めている。網を引くには小舟が数艘必要で、また豊漁を確実なものにするために、小舟は、湖の一區画を一時間あるいはそれ以上の時間をかけて満遍なく動き回っていた。そのあと、網が休み茶屋近くの浜辺の上に引き上げられた。網を取り囲んで大はしゃぎしている子供や女性たちは、網にかかった獲物の中から自分たちが欲しいと思うものを選び出し、それを料理してもらい、茶屋で食していた。漁師は、二十円を下回る料金では網を出そうとは思わないので、結果としてこの娯楽はいくらか高くつくことになる。・・・



上：彦根長曾根湖岸 魚市樓支店 納涼席
〔其ノ一〕、下：同 〔其ノ二〕（野瀬正雄氏所蔵）

この文を初めて読んだとき、「芹川が湖に注ぎ込む地点」の「浜辺」にあつたとされる「何軒かの小さな休み茶屋（tea-houses）」の具体的なイメージがどうしても湧いてこなかった。彦根市に長年住んでいる年配の方々に、明治後期、芹川河口の湖岸に「休み茶屋」があつて、湖で漁をした魚を料理してその茶屋の中で食べさせてくれる娯楽があつたと、ある本に書かれているのだが、そのことについて何かご存じないかと尋ねてみたが、皆さん、知らないという回答だった。

この記述については、その後も気になつて調査を続けたが、有力な情報は得られなかった。ところが、ある日、彦根に係る絵葉書の豊富なコレクションを有する野瀬正雄氏を訪ね、芹川河口にあつた休み茶屋のことについて尋ねると、どうやらそれらしい絵葉書を所有しているとおっしゃるではないか。そして、絵葉書の入ったファイルを取り出してこれ、私に三枚の絵葉書を見せてくださった。

これらの絵葉書には、「彦根長曾根湖岸 魚市樓支店 納涼席」という説明がついている。「其ノ一」の絵葉書には、数軒建てられている茶屋の背後に、もくもくと煙を吐く高い煙突が写っている。これは、平成一五年末まで長曾根湖岸（芹川河口の北東側湖岸）沿いで操業していた鐘紡の工場の煙突であると考えられる。湖岸線と煙突の位置関係からすると、これらの茶屋は、いま滋賀大学の学生寮「偲聖寮」が建っている場所（あるいはその付近）にあつたと推察できる（寮生たちは、寮が建てられる以前、このような風流な休み茶屋がその地に建てられていたとは、誰ひとり想像もつかないに違いない）。鐘紡の大規模な工場が長曾根湖岸沿いに建設されたのは昭和五年であるから、これらの絵葉書写真が撮影されたのは昭和以降ということになる。ポンディングが来彦したのは明治後期なので、時代はかなり離れてはいるが、彼が見た、湖で獲れたばかりの魚を料理して給仕してくれる tea-houses とは、のちに「納涼席」と呼ばれることになる建物——少なくともそれに類似する建物——だつたと考えてよいのではないか。



湖月樓納涼臺（近江彦根） 絵葉書
（野瀬正雄氏所蔵）



彦根長曾根湖岸 魚市樓支店 納涼席〔其ノ三〕
(野瀬正雄氏所蔵)

治大正昭和 彦根』に載っているし、細馬宏通氏も『絵はがきのなかの彦根』(サンライズ出版、二〇〇七年)で取りあげ、写真付きで、「湖月楼が創業したのは・・・明治二年」、「湖水魚のハスがよく取れる夏に、屋根付きの納涼台を出す・・・湖を直に眺めながらハスの塩焼きや味噌をつけた魚田、そして鰻料理に舌鼓を打つ」と説明していて、彦根市民にもそれなりによく知られていた。しかし、それと同じようなものが、すでに明治の後期から長曾根湖岸にもあり、それも複数軒建てられていた(ポンテイングは tea houses とちゃんと複数形で書いていた!)ことは、もしポンテイングが記述していなかったら、そして野瀬氏がこの稀少な絵葉書(管見の限り、写真集等でもネットでも、これまで見かけたことは一度もない)を保管しておられなかったら、忘れ去られてしまうところだったかもしれない。野瀬氏のお話によれば、長曾根湖岸に夏季、納涼席が設けられていたのは日中戦争か太平洋戦争の前までだったそうである(すると、三枚の絵葉書写真の撮影時期は、昭和五年から上述の戦争前までということになる)。

〔其ノ三〕の絵葉書には、長曾根湖岸の納涼席の内部が写っている。女性連れの男性が座ってビールらしきものを飲み、男女三人とも琵琶湖のほうに視線を向けて

いる。長い橋杭の上に建てられていた高床の納涼席からは、湖の景色や網船による漁の様子がよく眺められたことだろう。また、建物の半分ほどが湖水の上に張り出していて、窓が一つもない小屋の中は、湖からの涼しい風が吹き抜けていたはずである。さらには、獲れたての新鮮な魚を料理してもらい、そこで飲食を楽しむわけであるから、なかなかに興趣ある娯楽だったことは間違いない。彦根で長く暮らしてきた筆者としては、一度だけでもこの娯楽を体験してみたかったと強く思うのである。

(経済学部社会システム学科 金子孝吉)

*謝辞・・貴重な絵葉書を本稿に掲載することを快諾してくださった野瀬正雄氏に、心から感謝申し上げます。



参考写真：ポンテイングが撮影した玄宮園、
In Lotus-Land Japan より

二〇二〇年四月から一〇月までの史料館の動き

◇展示

令和二年度春季展示
「彦根から遥かなる琉球を想う」

※映像のみ公開

◇整理

真崎文庫浮世絵史料 四〇点

TEL 0749-27-1046 <https://www.econ.shiga-u.ac.jp/shiryō> 発行 滋賀大学経済学部附属史料館